

日本のジャズ界に新風を巻き起こしてくれそうな才媛ビューストがデビューした。東京芸術大学の作曲科で学んだ、恵まれた才能と美貌を併せ持つ野本晴美がその人。この数年、野本晴美は東京のクラブ・シーンで話題を呼んでいた。デビュー作の登場も時間の問題と思われていた彼女に、白鳥の矢を立てたのがヴィーナスレコード。特にピアノ・トリオと高音質録音のビューストというヴィーナスが手がけた、野本晴美らしいピアノ・トリオによるファースト・アルバム『アナザー・オーディナリー・ダンス』の登場である。『アコースティックなピアノ・トリオ』というスタンダードフォーマットでの自分の表現したい」と語る野本のヴィーナスとの契約は、理想的なスタートといえそうだ。

野本晴美はデビュー作のレコーディングに2つのトリオをセッティングした。ひとつは福田哲朗（ベース）トニー・キャンベル（ドラム）によるトリオ、もう一つは浪山晶之（ベース）、江藤良夫（ドラム）によるトリオ。いずれも日本のジャズの第一線で活躍中のジャズ・ミュージシャンばかりだ。トニーは現在日本で活動しているアメリカの若手である。野本晴美に彼らの魅力を語ってもらおう。「共演者は人とも私が影響を受けた人です。これまでに共演したことがあり、今回録音の話が来たとき、真っ先に参加したいと思いました。

福田さんからはいろんなパワーをもらいました。ストロングにスイングすること、ひびききたる音が素晴らしいと思います。トニーには楽しく演奏することを教わりました。ジャズは黒人のものというひけまがあったのですが、トニーはそういう気持ちをちょっとラクにしてくれました。

浪山さんは、膝下の力持ち的な存在でありながら、実はサウンドを支えている時がある。ベース・ソロもかっこいいですね。江藤さんは、深いビートの上に繊かなニュアンスをつけたり、音楽の幅を広げてくれます。

野本晴美のような理想的な共演者たちを迎えて、デビュー作を録音したのは今年の6月23日と7月1日。「録音の前日になつてごく緊張してきました」というから面白い。野本はそれをいり緊張して、みごとに自分のジャズを展開している。彼女のジャズ・ピアノは、自分の信念を曲げない気遣いを感じさせる。そして、「歌」をいつも持っていることが、彼女の大きな魅力ではないだろうか。

デビュー作に収録した曲は、3曲のスタンダード・ナンバーと5曲のオリジナル。スタンダード・ナンバーにおける解釈と演奏も魅力的で、野本の個性と音楽性が伝わってくる。「スタンダー

Another Ordinary Day
アナザー・オーディナリー・デイ
Harumi Nomoto Trio
野本晴美トリオ

1. マイ・シャイニング・アワー
My Shining Hour (H. Aida) : (8:04)
2. リブラ・ソフ
Libra Soft (H. Aida) : (6:07)
3. グルース・オン・サタデー
Blues On Saturday (N. Harumi) : (10:23)
4. タイム・テーブル・オブ・ライフ
Time Table Of Life (A. Ikeda) : (4:34)
5. ゴマ
Go Ma (N. Harumi Aki) : (7:08)
6. ユー・オンリー・ノウ・ホウ・ト・アイ・ノウ
You Only Know What I Know (A. Ikeda) : (4:37)
7. 時さ忍びて
I Didn't Know What Time It Was (R. Rodgers) : (8:47)
8. スターダスト
Stardust (H. Carmichael) : (4:38)

野本晴美トリオ (1,2,3,4,8)
野本晴美 Harumi Nomoto (piano)
福田哲朗 Horihide Shoda (bass)
トニー・キャンベル Tony Campbell (drums)
録音：2002年6月23日 東京、テイク・ワン・スタジオにて

野本晴美トリオ (5,7)
野本晴美 Harumi Nomoto (piano)
浪山晶之 Kenjiyo Tawarayama (bass)
江藤良夫 Yoshio Eto (drums)
録音：2002年7月1日 東京、テイク・ワン・スタジオにて

Produced by Tetsuo Hara
Recorded at "Take One Studio" in Tokyo On June 23 and July 1, 2002.
Engineered by Yoshio Eto. Assistant Engineer by Oki Onike
Mixed and Mastered by Yusaku 24th Hiper Magnet Sound :
Yoshiaki Saito and Tetsuo Hara
Photo by Michiya Nakashima / MIMA Music
Front Cover and Jacket Concept by Michiya Nakashima
Designed by Tak

ドはふんだんよく弾いている曲をとりあげた。<スーダスト>のような有名な曲は、有名なことで逆にとりあげられる機会が少ないようだが、私は好きな曲で、よく演奏する。>彼女の気配やいい要素が紹介されるようなコメントだ。収録した曲についてでも、彼女が紹介してもらった。「<マイ・シャイニング・アワー>は、好きな曲のひとつ。あとで言えば、ホルトーン・テイクで好きな曲だとスタンダード・ナンバーです。<リブラ・ソフ>と<グルース・オン・サタデー>は、最近私が作曲したオリジナルです。2曲とも、ずんなりと思う片断で出来た曲です。演奏や作曲は毎日の自分の生活を出すという感じがするんです。もう1曲のオリジナル<ゴマ>は、「セサミ・ストリート」を見ているときに浮かんだ曲なので、sesame = ゴマ = ゴマという風になつてちょっと言葉遊びをした曲名にしました。<タイム・テーブル・オブ・ライフ>と<ユー・オンリー・ノウ・ホウ・ト・アイ・ノウ>は、自分のアルバムにほしいと思つたんです。私は福田さんとはしばしば演奏しますが、尊敬するプレーヤーである福田さんの曲を紹介したいという思いもありました。<スーダスト>と<時さ忍びて>も、好きなスタンダード・ソングです。<時さ忍びて>は、ソニー・クラークの名盤『ソニー・クラーク・トリオ』(Blue Note)の演奏が好きで、思入れもあります」

野本晴美の演奏や作曲に対する姿勢は、興味深いものがある。「私にとってもこのタイトルは何も動かしません」とも彼女は語った。そこにジャズを見つめるクールな視線がある。「今の時代に生きているそのままの自分を表現したいんです。『私らしさ』を表現していきたい」という彼女にとって、ある意味ジャズの表現は、現在の自分の「記録」でもあるのだろう。ジャズは瞬間を切り取る芸術、という面白い言い方しほばせられる。野本のジャズに対する姿勢は、それを徹底しているのだ。そんなビューストはデビュー作に限り組んでいるプライベート・ホブのディフォルをセッティングして

野本晴美は、1973年10月9日に埼玉浦須原市に生まれた。母親が経営するヤマハ音楽教室&楽器店、4歳からピアノを始めた。レコード店を経営していた父親が天送し、その後で音楽教室を母親が始めたという。ピアノを通して音楽の才能をメッキと伸ばして行つた彼女は、東京芸術大学の作曲科に進学する。作曲科を選択した理由は、「毎日ピアノの練習をするのがあまり好きで、作曲のほうが、作曲のほうが好きだったから」という。学生中ジャズは出なくともはクラシックに傾倒していた。好きな作曲家として、ドビュッシーとラヴェルをあげている。ジャズ・ピアニストの大野三平のライブを見たとき、深く感動したのがきっかけで、ジャズ・ピアニストの道を進むようになった。学園のほうにはあまり関心を持たなかつたようで、弦大をドロップアウトしている。「ダメな女子大生でしたな」と彼女が苦笑む。その表情には、ジャズ・アーティストらしい生き様を感じさせた。

ジャズ・ピアニストとしてライブ活動を始めた彼女は、同時にあらゆるジャズ・ピアノの作品を聴いている。好きなピアノリストは？と聞くと、「現在は、デューク・エリントン、セロニアス・モンク、ソニー・クラークの3人です」と応じた。エリントンとモンクは、作曲家としても大層有名なわけだが、作曲とピアノ演奏の両方とも大好きだという。ジャズ・ピアノをいきなり始めた頃は、「フォー・アリストの譜面も、全然わからない状態だったんです(笑)」と振り返る彼女は、現在、池田篤をはじめ、中村篤志、中村誠一、土岐史郎らのバンドで活躍中の。作曲の才能にも恵まれた人だけあり、「将来は、大きな編成のバンドでオリジナル曲を曲げてみたい」と抱負もしている。彼女なら、ジャズ・ピアニストのみならず、作曲家、アレンジヤーとしても、オリジナルティ豊かな「今」のジャズをつくってくれそうに気がする。

(高井恒成)